

一代記

東京都 伊藤 真正

私は祖先より杜寺の家柄、神職や僧侶が多いのです。富山県大杉久松の三男で、明治四十一年一月九日の生まれました。父は県知事とともに北陸・北海道の開拓にて多忙であったため、私は六歳ころより祖母にて厳しく育てられた。小学校卒業後、旧中学校ころよりラジオの放送を聞く時代となり、中学校卒業後、友人若井さんと通信省電気通信技術専門学校に入学した。卒業後、通信省技術官を拝命。官吏として、北海道宗谷郡稚内町の通信省電信電話技術官駐在所に勤務した。ここは、利尻島・礼文島・千島列島・樺太島を海底線にて管理する職務所で、日本国では大変重要な所です。時々ソ連の海軍船が障害を起こすので、常に厳しく管理する責任の重い職場でした。

昭和四年四月五日、通信省電気通信技術専門学校卒

業。以後、通信省電信電話官吏として稚内技術官駐在所勤務を拝命、勤務する。

昭和六年十月一日、技術優秀にて通信大臣より褒賞状を拝受する。

昭和九年十一月二十五日、高野山大師教会伊藤覚淨の娘マ子と結婚し、教会後継者となる。

昭和九年十二月二十日、通信省官吏を退職した。

昭和十年一月五日、上京して東京都渋谷区元広尾町に居住し、高野山真言宗大師教会支部を建立。父母は、布教と加持祈禱をする。私は、高野山真言宗東京別院に役僧として出入りして布教等をする。

昭和十三年四月二十七日、父覚淨死亡する。

現住所にて母、智教と共に大師教所を維持する。

昭和十九年十月二十二日、召集令状を受け取る。母、妻、子供、三人を残して、町会の皆々様より歓呼の声にて見送られ、午後七時半恵比寿駅より列車に乗り、青森電信第四連隊に出発した。

十月二十四日到着、入隊す。六日間準備のため滞りして十月二十九日、青森駅より特別軍用列車に乗り、

以後、下関港に到着。輸送船に乗船して朝鮮の釜山港に上陸し、すぐ軍用特別貨車に乗り、北満トルチャ村に到着した。

関東軍電信十八連隊満州第七五八八部隊第三中隊に入隊。私は僧侶であるため、輪袈裟・経本・念珠・鈴等必需品は持参して入隊する。

入隊五日目から早くも英霊の部隊葬をさせられた。謹んで靖国神霊をお祈りいたしました。

私は僧侶でも、神仏の教義一切を修行しているとともに、部隊の通信業務もする。戦死、戦病死など各部隊の葬儀、埋葬等、一八連隊全部の中隊の英霊供養をする。

昭和十九年十一月二十日より十二月二十八日まで、北満州神掛山奥山中で戦闘用具をつけ演習をいたしました。これは関東軍十六部隊と満州第七五八八部隊の一部とともに参加させられたが、ここでも幾人か英霊供養する。

昭和二十年二月一日、電信第十八部隊長より特功賞を拝受した。

昭和二十年六月五日、北満にソ軍戦闘態勢に入ったとの通知あり。関東軍各部隊、また第七五八八部隊大橋隊長に私は同行して通化市に派遣、戦闘態勢についた。八月二日数百名の満軍と馬百三十頭を集め、通信機その他兵器を集結した。八月三日午前四時、馬百三十頭と満軍中隊、小隊を編制して、通信機、戦闘用具等を満載いたして韓順に向かい、八月九日、韓順本部に到着す。ここでソ連軍と戦闘しております。

八月十一日、戦死者が本部に多数運ばれてきたので、八月十三日、私は部隊葬をいたしました。八月十四日、隊長の命令により、私は通化市東本願寺別院に行き、英霊を預けた。

昭和二十年八月十四日までは、ソ連軍とあちこちに戦闘しておりました。私が通化市貨物所におるとき、八月十五日、貨物所の前の当司令部のラジオから君が代の国歌が聞こえて来ましたので、部隊一同は立ち止まって無言のままでありました。天皇陛下の、大日本帝国はこれ以上人類の悲劇を見ることはしのびない、ここに連合国軍の降服文書を受諾した、日本国民に停

戦の報を告ぐとの宣言の言葉があった。次に鈴木實太郎閣下が、停戦と同時に、連合国のポツダム宣言を受諾したと言う。三千年の歴史ある大日本帝国、大和民族が世界六十五カ国人の前に無条件降服したとは……。私たちは無言のまま各兵舎に帰った。全員が泣き、涙止まらず。

日本人は今後どうなるのでしょうか、と人民より私たち軍隊に涙を流して助けを求めてきた。満州人は日々の行動が変わり、日本人に対して暴虐になったので、治安維持のため日本軍が出動した。通化市には日本人が三万人くらい住んでいるとのこと。

八月二十日、祖国日本参謀本部より、天皇陛下の言葉に従って新京市関東軍本部に全員引き揚げるよう無線電信で言われ、ついに一同は八月二十八日、新京市貨物所に到着、下車。そのとき、ソ連軍に日本人の兵器類一切を取り上げられた。以後、新京市中央部にある関東軍本部前の西広高等女学校に仮兵舎として入れられた。毎日、ソ連軍人は日本人商店に暴虐し、また婦女は連れ去られて残虐され、毎日数十名殺されたの

で、学校の庭に多数埋葬した。また、市内のあちこちに死人が裸のまま多数あるのを見た。九月二日、新京市より四キロメートル先の南嶺村の、元張学良元首軍の満軍兵舎、また大学校舎が多くある所に移された。

九月三日午前二時、突然ソ連軍人より、奉天と新京間の鉄道工事を七日間して日本へ帰すとの話で、七日分の食糧を持って新京市北側の貨車所に到着して貨車に乗車す。中が二段でワラや草を敷いてある貨車に日本の軍隊二千数百名が乗車させられたが、いつ発車するかわからず、夜中に出発したようです。北に向かつて列車は走った。

九月二十九日、ついに黒河市に到着。大変な雨降りて大きなひょう玉も降ったので、寒さは厳しかった。二日ほど野宿して十月一日、黒龍江岸にソ連軍船が接岸、日本よりの占領品を積み込まされた。

十月三日、日本軍隊は船に乗船させられ、ソ連国プラグエシチェンスク市に連れて行かれ、上陸した。以後五日間程野宿した。ここには日本人捕虜が約六万人

くらい野宿しておった。食糧は一日一食分しかくれないので、空腹であった。

十月九日、ブラゴエシチェンスク駅のソ連国の八十トン貨車、中は二段で、下にはワラを敷いてある貨車に、日本軍人百二十名ずつ乗車させられた。また日本軍馬も乗車させられた。汽車はウラジオストックに行くという話であったが、発車して到着した所はバイカル湖であった。

約五時間ほど下車したが、行く先はわからないので、私たち日本軍人は一切の軍関係書類や特殊の物は全部焼きました。

次に汽車が到着したのはイルクーツク市です。ここで一泊して衣類の消毒をするとともに、シャワーで体を洗った。翌日より中央アジア高原を汽車は走り、ウラル高原を越えて十月二十五日ころウズベク共和国に到着しました。また、輸送中はあまり食糧をくれず水と塩で苦しかったので、日本軍人数十名が身体衰弱して死亡した。死亡者は、汽車が川の上を通るとき、日本兵の死体を投げ水葬。私は小さな声で教義を上げ、

供養した。ソ連軍はまことに野蛮人であると私は考えた。

また、汽車が時々駅に停まると、ソ連軍人は我々の貨車の鍵をあけて中に入って、銃を突きつけて時計や目ぼしい物を取っていった。

ウズベク共和国に下車させられた後は捕虜收容所地区、小さな島に入れられた。各国の捕虜がたくさんおり、またドイツ人は私たちに食糧やパンを持ってきた。私たちは感謝した。

幾日かたってから身体検査があり、軍隊時代は何をしておったかとソ連軍が調書を作った。私は日本軍人でも電信通信隊員と僧侶のため検査は簡単で、葬儀に使う仏具一切は取られず、持参することを許された。また死亡者の埋葬も許された。昼は作業をして、夜九時ころ日本軍人の病死者を、深さ一メートル、長さ二メートルの穴を掘って、死人の着ている衣類は全部ソ連軍人に取られるので、枯れ草を下に敷いて死体を入れ、上に枯れ草をかぶせて埋葬、法要した。

食事は満州国より持ってきたコウリヤンとヤギのは

らわたと頭と骨とトマトの塩漬けを、大きな鍋に入れ雑炊をつくる。朝食と夕食で飯盒の蓋に一杯分です。昼食は作業に出るため、黒パン四十五グラム一個である。

初めはレンガ作りで、一人五百枚作るのがノルマですが、できませんので苦労した。だんだんと枚数を上げられたのでノルマはだれもできずに苦労した。食事はノルマで決まるのです。また、レンガを使って家屋を造る作業をさせられたが、だれもノルマはできなかつた。また人工川をつくる作業は、四人一組で上砂を南京袋に入れて、一人のノルマ二立方メートルの土を二十五メートルの所まで運び川を造る作業で、多数の犠牲者が出た。ノルマができず数百名の日本軍人の死亡者が出ましたので、まとめて埋葬、法要した。また山に行き、火薬で発破をかけて石を採る作業、これも多数の日本兵が死亡した。私は昼は作業し、夜は死亡者の埋葬、法要をさせられた。食事は全部作業により%で決められたので、ノルマはできず、日本兵が多数死亡した。また食事は、満州より略奪してきたコウリ

ヤンとヤギの頭や骨の雑炊の食事であるので、アメリカ赤痢にて日本軍人は毎日多数死亡しました。ここに渡部隊長は死亡す。

私は、昼は作業をして、夜は戦友の死亡者を二キロ先のドイツ人・日本人捕虜共同墓地に埋葬、法要させられました。私は疲労したので、収容所の医務室に入院させられた時もある。私たちは病気になる、診断は日本軍医とドイツ軍医とソ連軍医の診断で決まるのです。しかし、よく面倒見てくれた。また、マラリヤ病もしたことがある。毎日外で作業をして帰ると、収容所の入口で全員がキニーネ薬三個、口の中へソ連看護婦にて飲まされる。これはマラリヤ病の予防薬です。昭和二十二年十二月一日、突然電気作業試験があり、十一名合格して、五日よりベクワッドメタルザボットイリクトリクツイの市の大きな鉄工業所と電気修理所に回された。伊藤特別班として私たちは電気技術者として派遣された。

私は特殊の作業をさせられた。乾電池作りや特殊電気機械一切、また発電機、ラジオ通信機作りの作業。

また私たち十一人で協力して一千馬力のモーターを作った。ドイツ人も一千馬力のモーターを作った。六千ポルトで運転する大変大きなモーターです。直径三メートル。またドイツ製モーターの電圧は五百ポルトにて回転するものです。またソ連製のモーターは三百八十ポルトで回転するのですが、日本製の満州よりソ連軍が持ってきたのは二百二十ポルトで回転するものがある。これらドイツ製も日本製も分解して、ソ連の三百八十ポルトにて回転するように作り変える作業をした。ノルマは一五〇%いただいた。給料は一カ月四十一ルーブルいただいた。ラーゲルの戦友にアンズやパンを買って、皆一同で食事した。久しぶりに空腹を補った。

私たち十一人は電機の作業をさせられた。この工場長は共産党員アリニコウフクというソ連人です。共産社会でも私が宗教家であると知り、良く面倒を見てくれた。マラリヤ病にて時々発熱するので苦しんだとき、また傷害を負ったときは特別に工場の医者が面倒を見てくれた。

日本人ラーゲルでは仲間同士が持ち物や食事のパンを取られ、また毛布を取られ、作業場に持って行き食糧などと交換する者が日本人の中に多く出たので、昭和二十二年八月一日より民主運動で大会を開いて、生きるも帰るもお互い助け合っていくべきである、利己主義にならぬようにと話し合った。

朝食は午前六時で、作業場に歩いて行くので一時間三十分かかり、作業するのは午前八時より午後五時までです。夕食は七時、その後は共産党の講義と批判会をする。九時半に寝るのです。

昭和二十三年六月十三日、第四收容所約一千名を五分団に分けた。私の班は八月より伊藤班で、特業として電信電話技術者二百名で通信関係ケーブルと水力発電所作業、大変苦勞して完成させた。しかし数名死亡者が出ました。よく完成したと監督に言われ、表彰された。二日の休みをくれた。

私は毎日朝三十分早く起きて、日本方面に向かい、神仏に合掌してお祈りをいたしました。私の班はいずれの作業所もまじめに作業をいたしましたので、昭和二十

三年九月中旬ころ、日本国ダモイとのことでナホトカ収容所第二分所に移動した。しかし帰国前、各収容所では、共産主義の心はあるかと試験された。

昭和二十三年十二月十七日、日本より日本軍人引取りにナホトカ港に日本船が入港したが、私の部隊の中に十人ほど、共産主義をよく思っていない者がいることがわかり、日本ダモイは中止されて、五百人ほど、シベリア北極地のソソスカ州の奥山、第三八八管区第三地区という大変寒い所へ、汽車に乗せられて五口ほどで到着して下車後、その先は歩いて山間地に入った。家はなく松林である。松を伐採して松の葉にて仮兵舎を作り、松の葉の上に一枚の毛布を敷いて、三人が一つになって二枚の毛布をかけて寝る。兵舎の中はドラム缶数本にて焚き火して暖をとる。食事は満州国より日本の占領してきたコウリヤンと米を少し入れたお粥で、朝夕に食事は飯盒の蓋一杯分出る。昼は黒パン四十五グラムです。

食事はノルマにて決まるのですが、なかなかノルマができないため食事が少ないので多数の死亡者が出

した。午前六時に起床して七時に作業場に出発、八時よりソ軍に指定された松の木を切るのです。

一人のノルマは四立方メートルであるが、寒さと食糧不足ではだれもノルマはできない。日本兵が多数死亡したので、私が埋葬いたしました。

私も大変疲れて、作業が終わって帰る途中で倒れ、二時間ほど意識がわからずにいたが、意識が復活して月の明かりで一人で兵舎に帰ったこともある。各人も皆疲れているので、他人のことなど面倒見る人はいない。私が一番最後の作業場より帰ったのでだれも知らないようでした。

また、仮兵舎の青い松の葉を積んで作ったところで寝るのです。この地区には茶色ダニ虫、黒色ダニ虫と赤色ダニ虫が多くおり、猛毒ダニ虫です。特に赤色は大変猛毒が多いので、ソ軍人や地方人は恐れてこの山にはあまり入らないとのこと。私はこの恐るべき地区で松葉の仮兵舎で作業させられ、夜は松葉の上に寝、朝起きると猛毒赤色ダニ虫が頭や顔、首、手足などに数匹が血を吸っているので軍医さんに取っていた

だいたいのものです。幾度もこのようなことで、ついに四度くらいの高熱が続いたので意識はもうろう、耳鳴り、目も悪くなりついに倒れ山間の医務室へ入院した。日本軍医とソ軍医の診断の結果、猛毒ダニ脳炎症病であると診断して二時間に一本ずつ注射をしたようで、

八日間注射と水でようやく生死の境を逃れ生き延びていた。ソ連人監督は、普段まじめに作業をしている私を知っているので、ソ軍医付添い付きで山間の医務室より自動車と特別汽車にて、ナホトカ港より四キロ地区にある第三一九九病院に転入院させてくれた。この病院は重症者病院で、毎日幾人か死亡して裏の墓地に埋葬される所です。

昭和二十四年七月一日、日本国高砂丸病院船がナホトカ港に入港した。第三一九九病院のソ軍将校とソ連軍医から、日本国に帰りたくないかと言われ、病室を歩かされたので、私は半身マヒした体、棒をついて室内を歩く状態だったが、日本国へダモイすることが許されたので取るものもとりあえず、藤村氏に抱かれて第一分所収容所へ午後五時半ごろ到着した。今まで祖

国日本に生きて帰れるとは思っていなかった。神仏のお陰で、病床ながら日本国高砂丸病院船に乗船した。私は重症であるため日本医師付きで中央に乗船させられた。これみな神仏と幾千名の英霊の埋葬供養をしたお陰と感謝しました。

昭和二十四年八月四日、日本舞鶴港に入港する。上陸後簡単な検査をし、復員手続を終わりに、国立舞鶴病院に入院しすぐ治療を受けた。毎日、注射と脊髄より太い注射針にて液体や血を取り、院長初め多数の医師にて検査された。治療中に二回ほど意識がわからなくなったことがあった。以後、三重県国立鈴鹿病院に、転入院した。頭痛激しく耳鳴り、目も悪くて苦しんだ。ここでも意識がわからなくなった。そのとき、私が軍隊に入る前の昭和九年ごろ、大変お世話になった京都大学病院飯田先生が突然お見舞いに来られまして、院長先生とともに治療していただき、夕方意識が戻り、心から感謝とお礼を申し上げた。

後日、私は故郷は東京です故、東京の病院に行くため国立東京第一病院（現国際医療センター）と国立東

京第二病院へ厚生省医事課に転入院させていただき、手紙を私自身で書いてお願いしましたら、国立東京第二病院の院長西野忠次郎先生と副院長伊藤恭次郎先生のお陰で、目黒区国立東京第二病院へ昭和二十六年六月二十六日、転入院いたしました。大変難病で、慶応医大の先生、慈恵医大阿部先生、また諸先生で大検査と治療をしてくださった。検査中に一度意識がわからなくなつたこともある。常に頭痛激しく生死の境を見たこともありましたが、諸先生のお陰で特殊の薬をいただき、よく面倒見ていただき、感謝しつつ八病棟に入院しておりました。私の気分がちよつと良いときは、七病棟に朝鮮人その他外人、また日本軍人で、治療は終わっているのに数十名、退院せずにいたので、この傷痍者を退院させるべきと考えて、春は花見、また靖国神社に幾度となく連れて行き、諸天参拝、鈴木宮司さんのおられるとき、年三回くらい参拝。また明治神宮参拝又は坂下門より皇居拜観、あちこちと慰安して、以後お話の結果、多数人を病院より毛布とベッドその他用具、無料でいただいて退院させました。また厚生

省に行き、戦死者の遺骨が大きな部屋に安置してあり、年二回供養に私は行きました。

昭和三十一年八月三十一日、経過退院して外来治療をいたしました。我が家に帰ると、妻は三十二歳で東京大空襲で死亡、私は戦死となり、戸籍復活に苦労した。我が寺は他の人に持つていかれ、母と女の子一人が小さな家におりました。他の上の三人の子供は三重県の親戚に疎開しており、私が退院後引き取り苦労したが、以前病院入院中葬儀した信者、都民また町会の人々と、入隊以前の友人その他の人々の励ましと、皆々様の応援で、傷痍病持ちながら、また病院の外来治療を受けつつ、皆々様のお陰で何とか子供は一人前に育て上げ、社会人として家庭を持たせました。母は三十三年に死亡する。以後、何とかして小さな寺院を建立して、戦地ソ連捕虜時代に埋葬した英霊をまつり供養したいと努力したので、約七十人ほどの信者ができました。子供たちは今日の社会制度でそれぞれの家庭を作つてついに私一人になつたので、松本さんの世話にて、立川市富士見町の中年、梅田センと昭和三十

七年再婚いたしました。

昭和五十年九月四日より十九日、戦地とソ連国捕虜時代数千名の英霊を埋葬して、傷痍の身ながら祖国日本に復員したと、また多くの信者を供養していることを思い、和歌山県高野山総本山大師教会本部主催で、皆々様と医師一人とともに四国八十八カ所を巡拝いたしてきました。

昭和五十一年、妻センは寺院建立のため、立川市富士見二一六―三の宅地を境内地として応援してくれましたので、私こと、戦争に出動し幾度となく生死の境を乗り越えてきたことと、数千名ほどの霊、また戦病死者を埋葬、供養したことと、祖国日本に復員できたことは英霊と神仏のお陰であるとのこと、寺院建立をして永代供養することを決心して寺院建立にかかりました。

昭和五十二年四月ころより、八十人の信者と総代人の応援にて寺院建立にかかりまして、東京都元麻布高野山真言宗正光院住職高橋隆進僧正殿の応援と都内各寺院の御後援にて昭和五十三年三月二十五日、高野山

真言宗眞泉院が建立完成いたしました。

布教に専念するこれまでの年月の間、幾度となく戦傷病にて倒れ生死の境のこともあったが、国立東京第二病院の先生方と都民の皆々様の助けで生き延びてきたことを衷心より感謝します。また、子供は中年なれども高野山地蔵院住職のお陰で、僧侶になるため和歌山県の高野山総本山専修学院に入学させ卒業して、私の徒弟として布教のため眞泉院檀信者のために努力しています。また、孫も高野山大学校を卒業させまして、以後、八王子市金剛院に役僧として勤めております。

昭和五十九年七月二十日、眞泉院建立の境内地百三十坪奉納、また寺院建立費用の一部奉納を応援してくれた妻伊藤センは、立川国立病院にガン病にて入院して特別専門医師先生にあらゆる治療してもらいましたが、体の腹部全体がガン病菌に冒されており、特別病室に二人付添いを付け、私には大恩人なので、あらゆる治療をするも、ついに昭和五十九年七月二十日午前六時、死亡しました。

私は戦地、またソ国捕虜中に幾度となく生死の境に

追い込まれ、戦傷癒たるも祖国日本に復員して皆々様に面倒見ていただき今日生きるとは、神仏と靖国の英霊が守って下されたことと心から感謝して合掌する。私は朝夕、当山眞泉院にて各祖霊と戦地時代の英霊とソ連捕虜時代埋葬した聖霊には毎日法要しております。特別位牌を作っておまつりしています。

今日は世相は変わり、私も老年八十八歳になりましたが、日本国民に昔のような世相はなくなりました。

敗戦前の日本の美徳はなくなり、私から見ると日本はどうなるのでしょうかと考えます。いかに世の中は進歩しても、地球上の人間は正義を守って、靖国の英霊、神仏に報恩感謝を忘れてはならないと私は思います。私は復員するまでは戦死となっており、一切の戸籍まで戦死となっておりましたので、手続きして復活しました。私の兄弟は海軍で戦死しておりました。

今日、復員以来、戦傷後遺症で国立東京第二病院に月二回、外来で治療を受けておりますが、平成五年十一月二十六日戦傷後遺症に倒れたのです。過去入院した国立東京第二病院でないと治療と薬はないソ連捕虜

特殊病です。私も後いくばくもない生命と自覚しております。第二次世界大戦に出動して戦地はわずかでしたが、常に数十名の英霊法要、またソ連国抑留中は中央アジア共和国その他四国、シベリア北極ソスカ州で数千名の英霊を埋葬、法要しました。私は小さな寺院ですが、各聖霊をまつり朝夕供養しておる者でございます。

捕虜生活から心に決めたこと

福島県 大和田 正 友

*召集令状がくる。

昭和十九年九月、召集令状がきたときのことを思い出す。青年学校の生徒を引率して軍事教練の指導員とともに、学校から十キロメートルばかりのところにある休石温泉を基地に演習に行っていた。小学校教師の若い同僚七海義定君が白転車で宿の坂道を登ってくる。「僕にきたな」とパツと予感が走った。そのとおりで